

うちの指揮官には謎が多い

社畜のきなこ餅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

指揮官には謎が多い。

どこで生まれたのか、どんな経歴を歩んできたのかはG&Kでは重要機密に分類されている。

そんな指揮官を取り巻く愉快な日常。

目

次

謎が謎を呼ぶ指揮官

千年戦争指揮官オンライン

艦隊指揮官アリーナ

12 7 1

謎が謎を呼ぶ指揮官

ソレはある日の、いつも通りの昼下がり。

L 85 A 1 が訓練中にジャムリ倒したり、G 1 1 が適当にほつぽり出して いた弾薬を湿気らせたりと言つた多少の事件を、生真面目な W A 2 0 0 0 が報告書をまとめ指揮官を訪ねた時の事である。

「指揮官、報告があるんだけど……あら？」

勝手知つたるとばかりに、用事があろうとなかろうと頻繁に訪れている指揮官の部屋をノック後ノータイムで扉を開けてみれば。

そこにいたのは、指揮官が転寝してゐる時に良く使用しているソファの上で微睡んでいる G r G 4 1 しか居なかつた。

はて、と首を傾げる W A 2 0 0 0 。

彼女は何もノープランで報告に来たわけではなく、それとなく他の人形達に指揮官がどこにいるか確認した上で部屋にやつてきたのである。

しかし、扉ならぬ蓋を開けてみればそこに居たのは狐のような耳が特徴的な G r G 4 1 。シユレデインガーの猫ならぬシユレデインガーの指揮官状態と言えるのかもしれない。

されどもこのまま呆けていても埒が明かないと彼女は気を取り直すと、むにやむにやと気持ちよさそうに寝言を呟いている G r G 4 1 を搖すり……。

「むにや、ご主人様……？ なんだ、ちがうのかあ……むにや」

「露骨すぎるわねアンタ……いいから起きなさいっての」

寝ぼけ眼を開いた G 4 1 は期待に目を輝かせながら、目の前にいる W A 2 0 0 0 を視認すると一瞬でその瞳に失望を浮かべて二度寝に

入ろうとする。

ご主人様ならぬ指揮官至上主義じみた人形は彼女以外にも何人もいる部隊であるが、その中でもとりわけ露骨な態度を隠そとしない彼女にWA2000は口元をヒクつかせながら再度振り起こす。

「むー……で、なに？」

「指揮官どこに行つたか知らない？　他の子からは部屋にいるつて聞いてたんだけどさ」

くあ、と欠伸をしながら佇まいを正し不機嫌そうに膨れつ面で見つめてくるG41をスルーしつつ、WA2000は目的の人物である指揮官の行方を尋ねる。

なんせ彼女自身も報告にかこつけて、指揮官に甘えようとしたのに盛大に肩透かしを食らつたのだから必死である。当人は決して認めようとしないが。

「知らないー、けど。わたしを撫で撫でしながら、古戦場がー古戦場がーつてうめくように呟いてたよ？」

「古戦場……？　どこかの戦場跡で問題でもあつたのかしら……」

行き違いになつたのかしら、とWA2000は溜息と共に自己完結するとG41に一言詫びを入れて部屋を後にする。

そんな彼女の寝ぼけ眼で見送りながら、G41はふと首を傾げた。

「そーいえば、ご主人様いつおへやから出たのかな？」

自分がお昼寝するまで頭を撫でてくれていた指揮官が、どのタイミングで部屋から出たのか感知できなかつたG41は不思議そうに呟く。

普段は指揮官の身辺警護と言う名目で傍に纏わりついているG41であるが、その我儘を押し通せる程度には功績も能力も十分なG4

1。

当然、感覚機能も相応に優れているのだが……そんな自分にすら指揮官が部屋を出た時を感じきなかつたことに、疑問を感じる。

「まあいいか」

自身は主人と定めた指揮官の忠実な銃、それだけでいいとG41は結論づけると指揮官の匂いが染み付いたソファに再度横になつて幸せそうに転寝を再開するのであつた。

指揮官のデスク上に放置されている、中身が空になつた赤く透き通る瓶に気付く事もなく。

そしてまた、別の日。

任務上の都合により指揮官もまた前線へ赴いていた時の事であるが、鉄血兵らの不意打ちを食らつた時の事。

遮蔽物が碌がない、その中で受ける集中砲火は絶望を告げるものでしかなかつた。普通ならば。

「指揮官！頭を低く……え？ 何掘つてるの？ 塹壕？ 間に合うワケ……え？」

せめて指揮官を逃がそうとダミー人形達を壁にし……自身を囮にしてでも指揮官を逃がそうと決意しながら振り向いた、UMP45が見た指揮官の姿は。

スコップで一心不乱に地面を掘り返している姿であつた、常識で考えれば錯乱しているとしか思えないその光景であるも……思わず呆けるUMP45の目の前で見る見るうちに土が掘られていく。

「凄いね指揮官！45姉もはやくはやく！」

「9！アンタいつの間に真っ先に潜り込んでるのよ!!」

昔取つた杵柄だ、などと誇らしげに笑う指揮官の背後には真っ先に即席塹壕へ飛び込んだと思しき妹分、UMP9がひよっこりを顔を出して姉貴分のUMP45を手招きしている。

何だかものすごく納得いかない、私の覚悟なんだつたのなどと不完全燃焼を抱きつつUMP45もまた深さ1mほどの塹壕へと飛び込む。

「何でスコップやツルハシに斧を持つてるか不思議だつたけど、こういうのに備えてたんだね指揮官！」

「ずっと不思議だつたんだけどね……え？ 昔からの習性で持つてないと無性に落ち着かない？ 指揮官、前はどんな仕事してたのよ……」

頭上を鉄血兵らが放つた銃弾が通り過ぎているも、若干弛緩した空氣の中呑気にパンをかじる指揮官はお前らも食つておけと二人ヘパンを差し出す。

差し出された二人はと言えば、妹分の方はいつものにこにこ笑顔で受け取り無邪気に齧り始め、姉貴分の方もまた釈然としない表情ながらも受け取つてはむはむと食み始める。

その後、不意打ちを仕掛けてきた鉄血兵らは特に悲劇もハプニングもなく蹴散らされるのであつた。

「いやー、どうなるかと思つたけど指揮官のおかげで何とかなつたね
45姉！」

「うん、まあ、そうね……え？ 匠がいたら危なかつた？ 何それ……
全身縁で自爆する不思議生物？ そんなE.L.I.D発症者聞いたことないわよ」

更にまた別の日。

ドンパチも喧騒もないとある日の事である。

「あ、指揮官様じやないですか。花壇を整備されてるんですか？」

データとして撃ち込み終わった作戦報告書を詰めた段ボール箱を抱えたカリーナが発見したのは、基地の中庭の片隅にある花壇を整備している指揮官であつた。

AUGを含めた人形が花壇を手入れしている姿は時折見かけていたが、この場所で指揮官を目撃したのは初めてだつたので彼女は思わず声をかけたのである。

「どある知り合いから種を譲つてもらつたけど、植える場所がないし増やしてる。ああ、なるほど……」

見かけるたびに花壇が増えていたのは、今も黙々と花壇を整備している指揮官が原因だつたのかと地味に疑問に感じていたことが氷解して思わずカリーナは頷く。

そして、世界に汚染が広がり植物の種すら入手が難しい時代にも関わらず花の種類が増えていた理由も判明して二重にスッキリなカリーナである。

「この前増えてたお花を調べたら、ビオラっていうお花でしたけど……今度は何を植えられるんですか？　え？　ヒガンバナ？」

なんだか物騒な名前ですねー、などと呟きつつこの際だから色んな花を教えてもらおうと想い、カリーナは段ボール箱を下ろすと手近なベンチへと腰掛ける。

「折角だから色々教えて頂けます？　わーい、ありがとうございます！」

黙々とレンガを積み上げ、植物に応じた土壌を整えていく指揮官を楽しそうに眺めつつカリーナは視線を巡らせると。

目についた花を指差し、指揮官へと尋ねていく。

「アレは……マンリヨウつて言うんですね、あちらは……ナデシコ、そして向こうはクリスマスローズつて言うんですね」

カリーナが指差して尋ねて見れば、指揮官は即座に答えては簡単な花について教授していく。

「しかし凄いですよね、こんな色んなお花……え？ 少し特別な種だからこうも育てられるだけで、通常はもっと大変なんですか？」

ちなみにその種の出所は……とカリーナは聞こうとするも、指揮官はあいまいに笑ってはぐらかす。

そこをなんとか、とカリーナはベンチから立ち上がり屈んで作業を続いている指揮官に背中から抱き着いて、耳元で囁いておねだりをする。が次の瞬間。

カリーナの背筋を冰柱で刺し貫いたかのような悪寒が奔り、悪寒の出所へ向けて鏗び付いたような動きで顔を巡らせてみると。

いつの間にか作っていた中庭のため池に生い茂っていた、オオオニハスが異様な存在感を発揮していた。

その異様な存在感に、カリーナは斧を携え……につこり笑顔を浮かべと獲物を刈り取る狩人がごとき瞳をしている美女を幻視してしまう。

その後しばらくカリーナは中庭に近寄ろうとしなかつたらしい。

千年戦争指揮官オンライン

のんびり陽気が降り注ぐ穏やかな昼下がり。

大規模な作戦が一端落ち着いたこともあり、基地では人間も人形も思い思いに過ごしていた時の事。

「入るわよ指揮官……何してるのでしら？ 指揮官」

目の下に入れた涙のタトゥーが特徴的な戦術人形、HK416がちよつとした用事を携えて扉を開いてみると。

指揮官が何やらデスクの上に樹脂製と思われる細かなパーツを広げて、何かを組み立てていた。

ついでにHK416の視界の隅に、G41が定位置となっているソファの上で一緒に爆睡しているG11に抱き枕にされながら魅されていたがそちらについては、意図的に見えないフリをした。

「プラモデル？ ふふつ、子供っぽい趣味もあるのね指揮官……」

配属されたばかりならないぞ知らず、彼女もまた指揮官に対しても好感度は最早トップ高。たまに指揮官がやらかす奇行すらも好意的に解釈してしまう手遅れな人形の一人である。

そんな彼女に微笑みかけられながら、ヅダを組み上げていると指揮官は応えると黙々とプラモデルの組み立てを再開する。

「結構変わったデザインのロボットね、このヅダ……かしら？ どんなロボットなの？」

指揮官が熱中している事も手伝い、見た事のないロボットに興味を示したHK416は、デスクに腰かけながら指揮官の手元を覗き込む。

ついでに意図的に胸元を緩めてみるが指揮官はアウトオブ眼中であつた。

「ジオン公国の主力機種のコンペに負けた、悲運の高性能機？ ……そう」

長々と語りたそうに指揮官は口を開きかけるも、何かを思い直し非常に簡素な解説でお茶を濁す。

なおこの世界には某御大は降臨していないので御大に纏わる一連の作品は影も形も存在していなかつたりする。

「ねえ指揮官、完成したら私にも見せ……え？ もう一箱あるから作つてみるか？ ……ふふ、完璧な私に相応しい仕上がりを見せてあげるわ」

自分のような経歴を持つロボットの存在に興味を持ち、話を持ち掛ければ返つて来た思わぬ言葉にHK416は一瞬目を見開いて驚くとすぐに柔らかい微笑みを浮かべ。

創作世界では悲運だつた子を、せめて私の手でもつと完璧に仕上げて見せると豪語してを見せた。

そして、後日。

指揮官御手製のヅダと、HK416御手製のヅダが並ぶのを二人で眺めていた時の昼下がり。

「ZZやジ・O、ユニコーンなんてヅダの敵じやない……？ 何のことかわからぬけども、そうね。この子は何者にも負けたりなんかしないわ」

珍しく呪詛めいた咳きを漏らす指揮官の言葉にきよんとするHK416であるも、指揮官へ体重を預けながら自信を持つて応えるの

であった。

その日の指揮官はどこかへ出かけており、帰つて来た際にはモスグリーンのまるで宇宙服のような薄いスーツに身を包み、変わった形状のフルフェイスヘルメットを小脇に抱えて居たりもしたが。幸か不幸か、その日はその件について突つ込みを入れる人物は不在なのであつた。

そしてまた別の日の事。

経験を積みダミーリングにて制御できるキャパシティが増えたS P A Sを伴つた指揮官は、人形製造の場へと足を運んでいた。

この指揮官はそれほど無駄遣いをしない傾向にある故、製造用の資材にはそこそこ余裕のある……筈であったのだが。

「I D Wだにや！」

「I D Wだにや!!」

「I D Wだにや!!!」

まさかのジエットストリームI D Wに、指揮官は思わず膝から崩れ落ちていた。

崩れ落ちる指揮官を心配そうに出来上がつたばかりのI D W達が囲み、にやーにやー慰め……慰められた指揮官は膝を震わせながらなんとか立ち上がる。

思わず気まずそうにしていたI D W三連星であるが、彼女達に罪がない故指揮官は気を取り直すと彼女達の案内を手近な所で見守つていたスオミに託す。

「あ、あの指揮官。わたしは今の人數でも十分やれますから……」

製造的にも運用的にも大食いな事、ついでに体重増加も気にするお年頃の入形なS P A Sは苦笑いを浮かべながら指揮官を気遣うも。

「え？もう後に引けない？あのー指揮官、それってギャンブルで全部失い系の思考になつてません……？」

コレはカリーナさんを呼んで無理やり止めるべき？いやでもカリーナさん呼ぶと彼女があの手この手で資源買わせて加速するかも、などという思考がSPASの電腦を駆け巡る。

そんな具合に逡巡している間に指揮官は泣きの一回の資源を準備し、人形製造契約を投入する……瞬間何かを思い出したかのように固まり、懐をこそぞと音を立ててまさぐりだす。

「指揮官、ソレは一体……？」

指揮官が取り出したのは青く透き通る、まるで女性を象ったかのような結晶体であった。

その結晶体はSPASの電腦にすら感じ取れるほどの神々しさに満ちており、羽根を広げたかのように見えるソレは女神じみた空気すら発していた。

「神聖結晶、ですか？なんだか凄く貴重なんですが……え、五個も入れちゃうんですか？というか、大丈夫なんですか!?」

SPASの叫びと制止もどこ吹く風とばかりに、製造装置に5個の神聖結晶を指揮官は放り込むと人形製造契約を投入。

柏手を打ち、一心不乱に神様仏様アイギス様などと祈り始めた指揮官の鬼気迫る様子に、SPASが思わず後退つたりして中……。

本来ならばありえない光が辺りを包み、一瞬だけ薄い羽衣のような衣装に身を包んだ6枚羽の女神らしき女性が見えたかと思えば、次の瞬間に新たなSPASの製造が完了していた。

「え？　え……？　え……?!」

目をぱちくりした後、手で自らの目を擦つた後二度見して今の一瞬の間に起きた現象にS P A Sが思わず驚きの声を上げる。しかし指揮官はと言えば、渾身のガツツポーズに夢中でそれどころで無いのであった。

——王子——王子、今日は特別ですよ——

何か幻聴がS P A Sの電腦にも聞こえたような気がしたが、彼女自身のメンタルケアの問題により彼女は聞こえなかつた事にしたのは言うまでもない。

艦隊指揮官アリーナ

とある日の事、平和でもなんでもない日。様々な諸事情と事故が起きた事により。

「何度も辛酸を味わわせてくれた部隊の指揮官を捕獲できるとは、狩りの成果としては十分だな」

現在進行形にて、ぐるぐる巻きな蓑虫状態にて指揮官は一人ハンターの目の前で宙吊りにされていた。

繩抜けしようともがいでいるのか、振り子運動がごとく左右に揺れているのが微妙に哀愁を誘う有様であるも、鉄血工造のエリート人形であるハンターにとつては嗜虐心を湧き上がらせる結果に終わるのみであった。

なお現在地はどこぞの放棄された廃墟の一室である。

「くくく、どうしてやろうか。このまま連れ帰つて情報を吐かせるのも悪くないが……」

舌なめずりをしながら、もがき続ける指揮官へ視線を送るハンター。

そんな視線を受けられた指揮官は、このまま好きにさせてなるモノかと必死にもがく、が……ダメ！

「……何？　びつちりスースを着せた上に感度三千倍にするつもりだろ。だと？　お前は何を言つているのだ」

対魔忍みたいに、対魔忍みたいに！などと叫びながら宙づり状態で振り子運動を繰り返す指揮官。

そんな指揮官へ、頭がおかしい何かを見るような視線をハンターは向ける……こいつここで射殺しておくべきかとまでハンターが電腦を巡らせる間にも指揮官の発言は続く。

「さらには触手を喰けた上に、○○で×な……?! なな……何を言つている?!」

良い子どころか悪い子もドン引きな事を口走りながらも、がき続ける指揮官の発言内容に、思わず後退るハンター。多分彼女は悪くない。

「やらないのかですって？ やるわけがないだろうがそんなこと!!」

白い肌を羞恥で紅潮させ、きょとんとした様子の指揮官へ向かつてハンターは吼える。

冷酷無慈悲な狩人として構築された彼女は、初心だつたらしい。

「捕えた人形の電腦弄るぐらいだし、捕まえた人間にも相応に酷い事するだろう……？ 否定はしないが酷い事のベクトルが違う!!」

どうせ捕まえた人形の電腦を弄つて×な事や△△な事させてんだけろー、正直に言えよー。などとぬかしながら振り子運動を繰り返す指揮官にどす黒い殺意を抱くハンター。多分彼女は間違つていない。そもそもが女性メンタルな人形所帯である鉄血工造陣営にとつて、戦闘には不要な事もあり少々デリケートな話題なのだ。

そんなワケで、ある意味において理解不能なナマモノめいた指揮官から一瞬であろうと目を離したハンターを、誰が責められようか。

「……もうここまで始末しておくか、代理人もきつと許してくれるだろう」

据わった目を蓑虫指揮官へ向けるハンター、しかしそこに宙吊りにされている筈の指揮官は影も形も存在しておらず。

さつきまでぶら下がっていた名残である、揺れた荒縄だけがそこに残つていた。

「……あ、あの人間めえええええ!!」

狩人たる自分をコケにし倒した末に縄抜け逃亡をやらかした指揮官への怒りがハンターの電腦を駆け巡り、冷静さを欠いたまま咆哮を上げ指揮官を捕えていた部屋をハンターは飛び出して行く。

荒々しい足音が遠ざかつていく部屋、やがて訪れる静寂。

そして、壁から現れる指揮官。なんとこの指揮官、咄嗟に懷から取り出した壁面に似た色の布を取り出して壁に隠れていたのである。何とか窮地を脱したと冷や汗を拭い、さつきまで自分を縛っていたロープを回収すると部屋の窓から垂らして脱出経路の確保をし始めた。

そしてロープを伝い下りようとしたところで、指揮官の背後から声がかけられる。

「なるほど、私の冷静さを奪つたうえで偽装していたのだな」

背後からの声に、そつと背後を振り返る指揮官。

そこにいたのは、透明な笑顔を浮かべたハンター。

わつはつはつは、と互いに呑気かつ朗らかに笑つた後。高速で指揮官へ銃口を向けハンターが発砲、指揮官は紙一重で窓の外へ脱出成功。

その後、指揮官がハンターから逃げおおせるのに半日ほどの時間を必要としたらしい。

指揮官がハンターからの逃避行を繰り広げてからの後日。

捕獲された切っ掛けが呑気に前線へホイホイ出歩いていた事が原因でもあつた事により、基地にて謹慎処分じみた扱いを受けていた日の事である。

多種多様な人形が配備されている基地であるが、戦術補佐用途としての妖精……ドローンもまた複数配備されていたりする。

妖精格納庫は勿論のこと、人形達の宿舎にてふよふよと浮かんでたり妖精と己を信じているA.I.同士がおしゃべりに興じてはいるのだが……。

「もつきゅもつきゅ……あれー？　あんな妖精配備されてたかなあ？」

お気に入りのチョコバーを頬張るF.N.C.が、見慣れない妖精が宿舎をウロチョロしていた事に気付く。

その妖精は、旧時代に運転免許証を手に入れたばかりの運転手が車輪へ張り付けるマーク、かつて若葉マークと呼ばれたソレが張り付けられた帽子を被つており。

何故かはわからないが、その小さな手で猫と思しきナマモノの前脚を掴みだらーんとぶら下げていた。

「変わった妖精だなー、どんな支援してくれるんだろう？」

チョコバーを食べ終わりハンカチで口の周りを拭いつつ、変わり者の妖精からF.N.C.は視線を外す。

そしてふと気付く、あの入形ドローンが近くにないどころか両足で歩いていなかつた？　と。

まさかそんななどと考えながら先ほどの妖精を見直すF.N.C.、しかし既にそこにさつきまでいた筈の変わり者の妖精らしき存在は影も形も見当たらなかつた。

「…………うん、見間違ひだよね。この前指揮官が行方不明になつた

時忙しくてごはん食べれなかつたから、疲れてるのかなー」

誰に言うでもなく、自分以外誰も居ない宿舎の部屋で薄ら寒い何かを押し隠そと一際明るくFNCは言い放つ。

そうだ見間違いだそうに違いない、そう己の電腦に言い聞かせてチヨコバーの包装を屑籠へ捨てようと立ち上がり、テーブルの上に座つてラーメンを美味しそうに啜つてる妖精を見て今日のご飯はラーメンもいいなー。なんて考えて。

「……ええ?!」

捨てようとしていた包装紙を握り潰しながら、ドローンも確かにそこに居たラーメンをする妖精を二度見するFNC。

しかし、やはりと言ふかさつき見かけた変わり者の帽子をかぶつた妖精と同様に、そこには影も形も居なかつた。

目を見開き、冷や汗を流しながら足音を殺してゆつくりと宿舎の扉へとFNCは歩を進め。

扉へ到達した瞬間蹴破る勢いで扉を開け放つと、半泣きで指揮官を呼びながらFNCは走り去つていくのであつた。

その後FNCはひよつこりと曲がり角の向こうから現れた指揮官を発見、目に涙を浮かべながら抱き着いて己が感じた恐怖を必死に訴える。

訴えられたG & Kの正式採用制服とは違う白い軍服を身に纏つた指揮官は、困ったように笑いながらあやすようにFNCを撫で続けるのであつた。